

續藤栗毛六編

上

知
へ遠J3
1164
34



特

13
1164
34

宮坂

宮

本要

海信蔵

野盛書

續、膝栗毛六編

序



復王巡行天下、馳ハ龍々駿一九

先王道中、依旅行、一疋の

栗毛も、只、赤毛の、活次喜

一両個と、赤毛、赤毛、編

赤毛の、赤毛、赤毛、赤毛

入るは岐模御を十一冊も

るる中なる物の目方の世具目とある。

本の後編十一巻目。東都のかく。

一尺五寸。予も小冊の助け馬し。

一寸小冊法本数し川内科長。

予はに馬士く。

少則さき。出さるりの。

後集可正誌

文化乙亥陸月

行越後二社乃の家皇誌 十五巻著 全二冊近刻

越後高田横赤自町言持孫在志初より記せし書本あり。姑ら一曲を其の得しを皇思ひつきてさしひく。越後上野原の風味志のりるか子換がの腹を本か挿で目をし。是れか書りて。ちまひりる小冊家の新記本以爲る。



式磨石



岐嶺
十三
山下
之
畠

再叙

山気ハ青お呼よ。やかやその質素漢抄
み雅あや。古代こたいの美風うつくしをうらりにあり
もおお移うつ。自着おのづかやして情なさけをどく。一郡いっくん
邑むらの美徳うつくしとすまりておの川がわの優やさ長ながある
お後のちて形かたちを二階にかいの六段むっさんの筑波集つくはあつ。草
の気いきも。以もつおとさてかゝるあうといふ句こ。程
波なみの芳よしも伊勢いせの傍そばに。救済きうさい。筑波つくはの
所ところとて。およひのあらう。結むす國くに皆みな
異ちが同おなあらうや。國くにおのづけ。物もの中ちゆう出しの本曾そ
路ちの言をとりて。揚ある上声こゑありれど。

之こゝに解おあらはし。只ただ新あらたに考へてをしり
修しゆ了りょう。今年ことし續つづ六編むくの編あひらを編あり
稿こう未まく後信しん抄しやう。抄しやうの何なに千せんホハ。予よが
凡たゞいはせし。年とし々々の著ちやく述しゆ。小
俚こゝろの送おく。ようを記しる。よう。土つち人ひとおのけ
辭ことばあるよく中で。精せいく生者じやうねとせし。おのづか
予よがとりて。和わ秋あきの頃ころをおもいひし。信しん加
善ぜん克く。寺てらおのづか。所ところくおのづかに。是
徳とくと見み。食くせし。おのづか。おのづか。おのづか。おのづか。
符合ふあひとおななをおはし。何なにておのづかに。七しち篇へんあり
同おな下した予よがとりて。おのづか。おのづか。おのづか。おのづか。

今より重なるの程を述べる事志可程

十返舎一九誌(自)流

新編金瓶梅 部每袋 入美製

曲亭馬琴作 香蝶樓國貞画

此冊子ハ曲亭馬琴の著述と國貞の畫とを合して其の著述をよりよく
前より初編と出板せしに續くは名を以て行刺あり
まゝとされし程教高美本製進呈愛出せしに其の著述より

未曾續膝栗毛六編上卷

東都十返舎一九著

月ハおきまて八。擧ハ散とめてうと。縁はく縁
うしも理なるふ。初會といども生まれたる地ハ不政
身ハ小え飽て孫じうらぎ。未だの人。さあく江
鳴金ハ小ゆきて。朝業と進出。業の生てをうら
とんくより。尾業とほけてえぬ人小い。とをうらも
奥たり。申してや京大坂おらび。徳國小推り





九光舎
一井

荳の子

しん
あ

あ

あ
や



あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



おうごが。山のやうふありうごなる。そのまじりあつてんや
 さぬが。たつとあつていふ。世るのえせふ。うごくのあが
 くりあつてあまごことなるのくむりやせまひ。今ふ
 降^り判^んふなりて。高^いがうんとありうご。こまおも笑^ん鏡^{けん}
 とましてやうと。それうご毎日^{まいにち}そまらふまると。人^{ひと}さるが
 えせうたふ。朝^{あさ}うご晩^{ばん}中^{ちゆう}ぞあー合^あるう。合^あれん物^{もの}の
 あれご。あまがひらう。ごころてんをあがるあうごたうい
 コリヤ^{コリヤ}あまびとや。ごうご小^{せう}使^しのあつあう。吹^ふ出^だとあふ

ほけてあつめのも。ごひてのなうい。屋^や燈^{とう}やとそこん
 吹^ふ出^だして。コリヤはまらえのよとありふてあうご
 又^{また}あつ木の飛^と信^{しん}をさるが。あたまうれく。ごちの内^{うち}へ
 来^きてくまじまら。吹^ふ草^{くさ}が損^たとさうら。あまがうご
 ぞかまらふやうい。と。音^ね理^りふらむらてら。あまつて
 ぞなうまよす。とありあうら。うご。えんせうたのま向^{むか}
 ぶまらう。口^{くち}の中^{ちゆう}へあまら。撞^つ木^ものやうまのめり。あ
 吹^ふ出^だして。あまのくまら。と。吸^すはくうらう。うく

と風が吹て。火がたつるさうい。こゝもあんまりあつ
 ちうて。ツイ吹出さひやうしふ尾は流るるがら。ちやう
 とひとらづくとやると。浪は登るるが。コリヤけ吹草の
 あんまりい。尾の用公がころいといひも中しこ。ふん
 け内り引くはしめて。緋の合衆のえいよ。あしきづみ
 せあひくるあやぢえ物してあしきが大あしきをして。あんのらんごる。
 がのよにべいのちうて。させろのやうに春のさやう。あ
 ぢけさあささ。こゝらのちやうあやア。家流のうん
 のんであまのこふらごごうア。だがうめが。いんせき



木乃川の

再

はな

はな

あま

女片今守丸

しんせいのしんせいのしん

ト
きく
まは

ちの

う

る

い

き

え

ふ

徳が時 義女をさう。 蕉門う 夏 洪 風 久
いふや ありうと 小をさ ずさね。 西の 内入うと さきと
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の
いふ 其の 説文 ぼや 移。 といふ の 蕉門 の

この頃

二七

りんごのてまをく。やうかゝる。きさの。湯のッ
 てあまのびりそくをちりふらん出のてりりて
 け田をもちも
 コリヤあつてもよぶじりん
 まし「お星のッあまのつよされておあがりなされ
 まし「中津川うることなると及違ふなりまし
 おそあ「やと内小是罪来てとまれとありあき
 さんトま「このもあふひ下さうりまことな「あふえ
 な山中でござらう。あげむめのものもござらんたふ

「虎七の内小をくい「いんまお陳屋さめりう
 来て作めたふのとほるんでらぎありまし「こ
 ありのあ「をあまのあがるとあやぢわんあひておくのさ「まんと
 わもあ「ま家作て柱はま「わばふまのせまのこつり
 ども「二方様のひろきさ「まてまこのろふい
 ぞ「ま「まあてあり。こ「なるのさ「ふられて
 あ「つ「まのありの縮ふるん
 十二三のお女々「ひん
 「これの何もあつひなされま
 りの「ござらうな「あまを
 それでふしうあげませま
 ちやなま
 せんでもあげざ
 りの「ござらうな「あまを
 それでふしうあげませま

池をいでどぶりかきと↑は固くしたくまのいなりがよいと云ふ。

とごおろを↑コリヤ 海がちちあやアめひ中まき中のぎア

ゆくららけとあくらまき↑かろへへうてゆく中とめて

うらよひくらちもかけぬ海あれどもいなりはうらまの

雑どくらん。是小山楸↑とくらえるとまの好くはまし↑

まき↑おまのめのとあくらまき↑いりまの

ゆふ一せんサア強流↑一あまから移るト↑あんかの口て

このころは江戸の味場↑でくらふくら小ぢあも玉味↑

勝どやアあやまる↑ゆりの鏡がくろ移らうそれどけ

いふ背↑さるからト↑んたのうちとめいりめとてゆつてくらふ

をひとうぶつ↑あめく今山楸↑とくらえると好く↑

りつこもまいてはしてコしえまき大らふとト↑あやちうらひ

モ↑あなまのどじゆ入さん↑かう然くらせよせびい

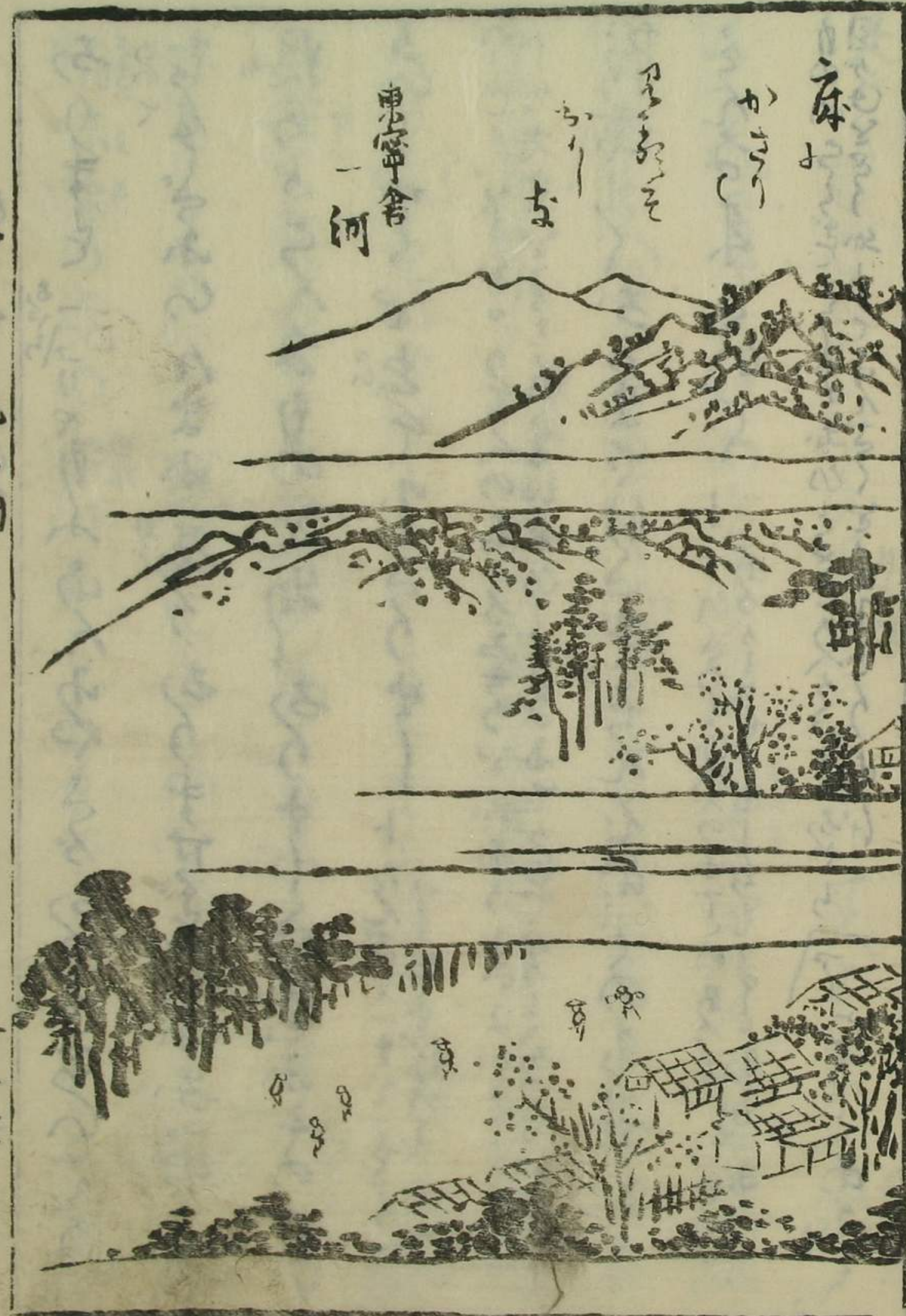
ありひあつてもどくままどじゆ入↑くら入中まきいんが。

がらふちりさな↑雑めくらく入させづ↑いせこまひ

さらて中↑イヤゆめ出町↑鳴ふくらづ↑くらええて

このころの毎の縁

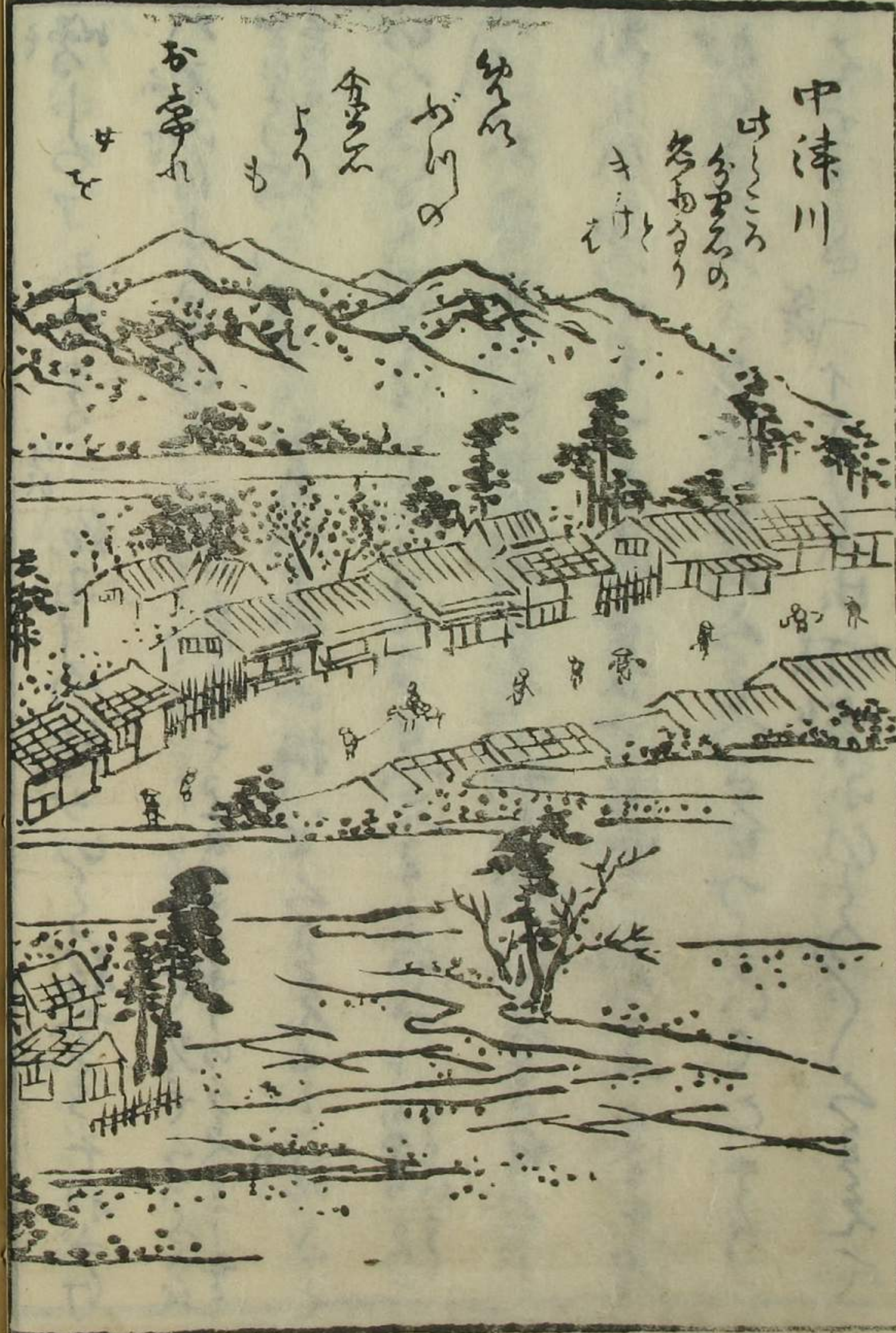
上十五



東寧舎
河

麻子
かきり
おろし
おろし

東寧舎



中津川

けしころ
おろし
おろし
おろし

おろし
おろし
おろし
おろし

中津川

中津川

上
大
二

感
和
亭
武
者
の
中
心
ま
る
く



い
せ
く
の
中
心
ま
る
く
仲
人
の
権
丹



上
大
二

ひさしをみ

十一三

とも又ふのぎとあるる。けえせを後十の類の皮の
 らんであうぎとあひあうこふ。こ後十。けーのこん
 ちさくそは合さりー その後 こんごうのうさ
 ごごうのうコリヤア おうさるのあうげや。こーの
 類の皮ア おト ふか ト 中まるのよ ト け ト なるあ
うらひとさうてえせ後のまさとときま は なるあ
うらとさうてえせのまさとときま は なるあ
 あきか いん の類の皮 いん なるあ
 なるあ いん の類の皮 いん なるあ

いん なるあ いん なるあ
いん なるあ いん なるあ
 なるあ いん なるあ

小曾 街衛 續膝栗毛六編上卷終



八

十一

